日本歯科医史学会々誌・第3巻
第3号通巻11号・昭和51年3月

京都大学文学部博物館・考古学陳列室の概要

都　出　比呂志*

求められるままに，京都大学文学部博物館の考古学関係陳列室についての簡単な紹介を記してみよう．

沿　革

年輩の人には，京都大学文学部博物館というよりも，「陳列館」の名前のほうが通りがよい．昭和30年に博物館相当施設としての指定を受け現在の名称となるまでは，京都大学文学部陳列館と呼んでいた．

現在の建物の竣工が大正3年であるから，既に約60年の年月が流れている．

そもそも，京都大学の創設の際から，陳列館を設置しようという構想はあったと言われる．この構想にそって，明治30年代から資料の蒐集が始められており，蒐集品は当初は附属図書館に保管されていた．これらを基礎にしつつ，明治40年に史学科が開設され，史学関係の調査研究活動の中で蒐集された資料の増加をもとにして，陳列館が開設されたわけである．

この陳列館には，考古学資料，古文書資料をはじめ，東洋史，地理関係の資料を展示，収蔵する陳列室とともに，かつては，史学科の教官室，研究室のすべてをも収容していたため，陳列館すなわち史学科の建物と称してもよい性格をもっていた．したがって，昭和40年に考古学を除く史学科の研究室が文学部東館に移転するまでは，「陳列館」は京都大学の歴史学関係の研究と教育の中心に位置していたのであり，多くの研究者が，ここから巣立っていった．

考古学資料については，陳列館の開設以前に浜田耕作が講師に就任し資料の蒐集を行なっていたが，大正6年に考古学講座が開かれるとともに，日本各地，中国，朝鮮における調査活動を本格的に開始し，その中で資料の充実を見るにいたった．

博物館の諸施設

博物館の延べ床面積は 2,757 m², 2階建てで，中庭があり，1階には考古学関係の教官室，研究室，書庫，陳列室，資料整理室があり，2階には，古文書室および国史・地理・美学美術史関係の陳列室と資料室とがある．

いまでこそ，古ぼけた建物であるが，建設当時は，モダーンな建築として注目を引いたという．大正初期の建築様式を伝えるものとして，建築史的にも貴重なものとされている．

中庭には，古墳時代の石棺3基，石室1基，平安宮の基壇の一部と寺院の屋根にのる鴟尾などが置かれ，建物の外側にも石棺や寺院の瓦積基壇などが並べられて，この建物に独特の風情をもたせている．

考古学資料の特色

「沿革」に述べたような経過を経て，数多くの資料を収蔵しているが，考古学研究室の過去50余年にわたる調査研究活動の中で蓄積されたものであるために，遺跡の発掘によって得られた一括資料の比重が高く，その点において学術的価値の高いものが多い．

日本のものについて言えば，縄文時代の京都府北白川遺跡，大阪府国府遺跡，岡山県津雲貝塚などの資料，弥生時代の奈良県唐古遺跡はじめ近畿地方の諸遺跡の資料，古墳時代では前期から後期の各時期にわたる，全国二十数基の古墳から発掘された一括資料，歴史時代では三重県夏見廃寺，

An Outline of Archaeological Exhibition Rooms of Kyoto University

* Hiroshi Tsude: 京都大学文学部

滋賀県雪野寺跡，京都府北白川廃寺などの寺院出土の瓦や塑像などはその代表的なものであり，とくに古墳関係資料の充実に特色が見られる．

また，中国や朝鮮など東アジアの資料も豊富で，中国の遼寧省を中心とする地域における戦前の発掘資料を含め，中国の各時代の土器・陶器・瓦・鏡などの資料は質，量ともにすぐれたものである．

以上は主として，第1陳列室に収蔵されているものであるが，第2陳列室にはヨーロッパの旧石器，古代エジプト関係資料をはじめ，東アジア以外の地域の資料が展示されている．

これらの資料のうち，日本・中国のものに関しては，『京都大学 文学部博物館 考古学資料目録』第1部～第3部に写真と解説がある．

利用法など

陳列室は，開設の当初から，大学の研究・教育の一環に位置づけられて出発したために，一般の多くの人々が随時にいつでも見学できるような施設と人員を十分には備えていないが，所定の手続きにもとづいて，見学願を出せば，見学し得る規定となっている．